

中井：現在までの資料には、「産卵量からのシラス漁況予測」と「後期仔魚の誘の量や降雨量からのシラス漁況予測、すなわち所謂補充機構研究結果」との間の一見矛盾の問題もあり漁況とシラスおよび成魚の漁況予測の問題も検討の余地が残されていると思う。しかし残念ながら予定の時間も過ぎたので不十分ながらここで一応打切りこれらの問題は今後の検討にまつことにしたい。

#### Ⅲ) カツオ、ビンナガの回遊経路に関する問題

コンビーナー 岩下光男（東海大学海洋学部）

話題および話題提供者

本年度カツオ漁況について 田中 有（東北区水産研究所）

本年度ビンナガ漁況について 岩崎行伸（東海大学水産研究所）

太平洋におけるカツオ資源構造について 川崎健（東海区水産研究所）

黒潮の流れを基盤として考えたカツオ、ビンナガの回遊経路

木村喜之助（東北大学農学部）

海洋学的にみた、カツオ、マグロ資源及び漁場の新見解

宇田道隆（東京水産大学）

### 1 本年度のカツオ漁況について

田中 有（東北区水産研究所）

#### 1) 本年度のカツオ漁況について

伊豆海域で本格的な操業がみられたのは4月下旬になつてからであつた。漁場形成場所も例年と異なり、青ヶ島から新里瀬に形成された。例年ならば黒潮流域の北側の潮境に形成されるが、今年はついに漁場形成に至らなかつた。そして例年見られる年魚（体長モード43～45cm）は全く少く、体長50cmにモードを持つ魚群（たぶん4年魚と思われる）のみであつた。日本近海に来遊する魚群の内で、来遊主群と云われる3年魚が東北海域でも非常に少なかつた。この様な年は過去にあまり例がない。もう一つ特徴としてあげられるのは3年魚以下のカツオの出現が7月上旬より見られた事であろう。東北海域の夏期漁場は150°E以西に、若年魚150°E以東に4年魚と云つた漁場形成が見られた。

来遊主群であるところの3年魚が少なかつた事が不漁の1要因であろう。

#### 2) マリアナ海域及び南洋カツオ

例年ビンナガ漁が終了すると7月下旬より延縄に切換えたカツオ船は、最近延縄漁の不振etcにより本年度は延縄出漁船は皆無であつた。静岡、鹿児島県船は7月上旬より、三重県船は10月より南方に出漁したが、昨年好漁が見られた10月～12月は不調であつた。

本年度の漁況を順に説明する。

1月はパラオ諸島附近からウルシ島北側にかけて漁場が形成されたが、漁況は低調。

2月には、ウルシ島北側よりグリメス島にかけて好漁があり、1日30トン以上の漁獲もかなり見られた。3月にも同海域で活況を呈した。4~6月はピンナガ漁もあり出漁船皆無。今年のピンナガ漁は終了が早く、そのためマリアナ海城への出漁も例年より早かつた。

6月下旬にはウラカス島西方に漁場が形成された。

7月にはテニアン島からウラカス島間に好漁が見られた。

8月には特に下旬アグリガン島~アラマガン島東側に大漁が見られ各船集中した。

9月にもマリアナ列島線東側の方が好漁が見られた。

10月には、漁場重心は列島線東側より西側に移り  $14^{\circ}30'E$  線に好漁が見られた。

11月は三重県船も南洋方面に出漁し漁場は広く調査され西は  $13^{\circ}E$  から東は  $14^{\circ}6'E$  南は  $N8^{\circ}$  にまでおよんだが好漁船は少なく一般に低調であつた。

昭和38~40年の3カ年間を見ると大体同じ様な漁場を形成している。2~3月は最も漁が良く、漁場は  $N0^{\circ}9' \sim 11'E$   $13^{\circ}8' \sim 14^{\circ}5'$  の間に形成されている。

39年3月には  $49cm$  と  $64cm$  モードを持つ魚群が見られ12月には  $51cm$ 、 $59cm$ 、 $70cm$  モードを持つ魚群が見られた。本年11~12月には  $61 \sim 62cm$  モードを持つ魚群が主群の様である。

## 2 本年度ピンナガ漁況について

岩崎 行伸 (東海大学水産研究所)

### 1) 海況概要

本年度紀南海域、房総南東海域の夏ピンナガ盛漁期にあたる5月下旬、気象庁海況旬報表面等温線図による海況概要を述べると、黒潮流路は3、4、5月の時期とほとんど変化が見られず、潮岬沖合を東進し、八丈島と三宅島を結ぶ間に流れ、さらに野島崎南東沖合  $60 \sim 70$  浬辺を北東に走り、其後、 $14^{\circ}30'E - 35^{\circ} - 30'N$  を南東に流去している。黒潮流による南下流は八丈島北方から青ヶ島附近にかけて顕著に認められる。また、南方からの暖流分派は  $13^{\circ}6 \sim 13^{\circ}7'E$ 、 $14^{\circ}0 \sim 14^{\circ}1'E$ 、 $14^{\circ}5 \sim 14^{\circ}6'E$ 、 $15^{\circ}0 \sim 15^{\circ}1'E$  辺の間をいざれも北西ないし北北西に顕著に張り出しており、昇温も顕著である。

黒潮流路の表面水温は昨年同期に比較して  $1.5 \sim 2.0^{\circ}C$ 、平年より  $1^{\circ}C$  前後低目である。また、黒潮流路以南海域では昨年同期より  $1 \sim 4^{\circ}C$ 、平年より  $1 \sim 2^{\circ}C$  低目を呈している。海況の昇温は昨年度よりは約30日程遅れており、昨年3月下旬の表面水温分布に似通つた配置を示している。

本年度最多漁獲の表面水温は、3月では  $19.8 \sim 20.5^{\circ}C$ 、4月  $19.2 \sim 20.4^{\circ}C$ 、5月  $20.2 \sim 21.8^{\circ}C$ 、6月  $21.3 \sim 22.3^{\circ}C$ 、7月  $22.4 \sim 23.8^{\circ}C$  を示し、昨年より  $1 \sim 1.5^{\circ}C$  位の低目の水帶で漁獲された(第1図参照)。